



備

岡山油町

余

贊文所

木屋三店

秋の袖子角 卷之二

目録

國姓社風 白川彦萬著述



僧
印
75
2

秋乃夜懷集卷之二



今更伏世の乞給の書を以て愚朴教匪
を書かずも傍布でアせす小僧久し多年
中や玉満するつづらうとゆく傳書す
是とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ
かくもとくとくとくとくとくとくとくとくとく
訓といつるあと拂ひりて方便云の印仰
かくもとくとくとくとくとくとくとくとくとく

形ノ如ク一五、神社の序内奉りと度
ニシム。鷹乃宮をかくす御事と傳の人主
ハ、御子に神社宮と称せよえども、とて
考りて御子と申す御事に御事と傳を
セハ御子も御の事と云ふ。一と度御
あく今是度と似、ヤマリ兩方とも、一と度記
ヤマリ其の御書のれありて、アツヒルトキミ
書紙アツヒルモ、サキや見近の御事もみ物と
ハシメテ、心遣き事小仰て、ヤハ、心遣き事也。

述々、室傷の事、古同の法原がせ御視セ
リ、も優秀す處アツヒル事、御不アツヒル事
アツヒル事、御不アツヒル事、も、も、も、も、
仰き奉り。

國の村丸は、サテテ、御日も、うるさく、御
事、御子と申政のも、また、御事、御事、御事、
も、と申すも、一人、御事、御事、御事、も、も、も、
も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、も、

月乃懸あくやうのこしのむかはす
老翁の事多きうりに花もとておほは
うす柳のよしもひをすくよみがお
えふるはなはれに於よしのまよ
老翁の野草をかやかやおもとて文
ゆうとてまよそよみ、いづくべく今よ
らむ。八日のはよぢとアリ。ほゆる
よそよそやまくすく。おおよ
いはよ月夜とよせんかく。今よまよ

お向ふ人にはまよひうるすむゆはき、先
まくちをまくへりあくとともいふ事かえ
まくちをまくへりあくとともいふ事かえ
ちくぢくの月がさむるまくちをまくへり
一又停のくはす宵の月をまくへりて
まくへりてしらまの月をまくへりて
月をまくへりて有るまくへりて
まくへりて有るまくへりて
有又ハ申承てゆきりあふか郁あまを

まく月をまくへりて有又ハ是の月をまくへりて
乃マ小粒かの有り又ハ多モ有り又ハ
黑小粒とナシテ多モ有り又ハ多モ有り
らむと有りて有りて有りて有りて有りて
拂のうふと拂のうふと拂のうふと拂のうふ
と拂のうふと拂のうふと拂のうふと拂のうふ
有又ハ申承てゆきりあふか郁あまを

もあはれんとほ月とへきて生る一の葉
そや葉口にしとふもと葉の葉へる
あはれのとゆういをうながすおもてせ
うち向ふ洞へる一の葉の葉へる葉
の葉も葉も葉も葉も葉も葉も葉も葉
も葉も葉も葉も葉も葉も葉も葉も葉
アシナースヤム人をちかく行けども
近きの月夜の月夜の月夜の月夜の月
アシナラセヒキテ筋と地と地と地と

一の葉へり向ふふく入る松へる葉へる
一の葉へり向ふふく入る松へる葉へる
松へり向ふふく入る松へる葉へる葉
アシナラセヒキテ筋と地と地と地と地
とアシナラセヒキテ筋と地と地と地と地
引出る月と月と月と月と月と月と月
月と月と月と月と月と月と月と月と月
記出る月と月と月と月と月と月と月と月

アヌヌヌのセハニモタムシテ事ナ

慕ムトモリシテ有ムモトモリシテ親ム

モリモリ惜ムトモリシテ想ム想ム想ム

大人の月見ムテヨリ思ムトモリモチム
「又未だ秋ノ月也アリテ種事ニハシムト

エリヤスミハスムトモリシテモリシテ

アリヨリセシムリテモリアリシマス

ニシテモリシテモリシテモリシテモリシテ

モリシテモリシテモリシテモリシテモリシテ

「おのれもまづ一歩
都あそびに
ゆきてゆくの月乃は
まつはるすや有りて
うのえむるゆめのいと
ふ聖川と今いともうかくと
ひそひそ暫く。程出を聖山の折し
きよしの小舟にせねてゆく
抱渡」也

抱復

とえ一のハナモトの事もアリ
の名をもつてやうに思ひます
はるかに思ひ出せば、思ひ出
までも思ひ出せば、思ひ出
てから思ひ出せば、思ひ出
りも思ひ出せば、思ひ出
れあへば、思ひ出せば、思ひ出
けふ思ひ出せば、思ひ出

猶ううちもととすらうとみよば傳の東ち田川
村のちくとてまわらじるまほ小室あまく
えむやうあし人まちほとてりふり角
見えとりつゝ有又はえととこいとし
すえきとくとくもゆきまかくさくま
や形も一見たまにアーテムリ墨
りとて前あくとくにけんやめくち
鷺の本草事のとく人りかく
ほく一ハ鬼とてハアハアハモ物と云

まハ前よかまみてまうかまふ人ハ妻田小
て名より家のもくわらとぞいとくと有ち
シテ後編へ續むとサヌトモ
足とハ経事ちうとくとくとくとくとくとく
とく

サムシハ雪の津と節とすとくとくとくと
乃ぬかく日ぬのねふなととせとせとせ
とせとせとせとせとせとせとせとせとせ
いさくせとせとせとせとせとせとせとせ

而影はくと云は

像也宣判の印卯すり附根ふんくと是も平
成いてあら地小筋は一筋の文書が右
も左へと拂一筆といひてかくあるとて
向とみる一筆の字をあるとて右と左
一筆の墨を拂わざる圓扇のわざに
筆の墨を拂ふとせんとせんとせんと
筆の墨を拂ふとせんとせんとせんと
筆の墨を拂ふとせんとせんとせんと
扇の墨を拂ふとせんとせんとせんと
扇の墨を拂ふとせんとせんとせんと

おもむかせぬとあらはすにまつたるは
すうじてを危へますとすこりのまつ尾
おもむかせぬ身のちがひをもとほしむる所見と
おもむかせぬとあらはすにまつて儀
ほひもおもむかせのくわいしゆりてゆる程め
おもむかせのくわいしゆりてゆる程め
おもむかせのくわいしゆりてゆる程め
おもむかせのくわいしゆりてゆる程め
おもむかせのくわいしゆりてゆる程め
おもむかせのくわいしゆりてゆる程め
おもむかせのくわいしゆりてゆる程め
おもむかせのくわいしゆりてゆる程め

おもむかせのくわいしゆりてゆる程め
おもむかせのくわいしゆりてゆる程め
おもむかせのくわいしゆりてゆる程め
おもむかせのくわいしゆりてゆる程め
おもむかせのくわいしゆりてゆる程め
おもむかせのくわいしゆりてゆる程め
おもむかせのくわいしゆりてゆる程め
おもむかせのくわいしゆりてゆる程め
おもむかせのくわいしゆりてゆる程め
おもむかせのくわいしゆりてゆる程め

おもむかせのくわいしゆりてゆる程め
おもむかせのくわいしゆりてゆる程め

事おとすかはりまくらを雪つて氷をひき
乃ちおわらひて坐て今其間をあ
ちゆーしむ

薦席へりかがはり高にしておき居た
アシキのよりりまほに黒着つぶさが草で
かり山へ入るのやまとくじまく
ハシタニ一宿入る、衣冠をそへても
さとひ皆へてはむかいて頂とま程の黒着
ハ山とのをとふあれどもぬかはれども

衣はけとちりともと候小室丸はれは
あひ病氣かきとてうそとてもあん上方
ちよとせまくらを極力拘はばらね
室田はいわむのあへたまして生え
アヘンはる黒着つぶさが草のちね
ハシタニ一宿入るのやまとくじまく
あふとひとまくらを極力拘はばらね
涌よしとすかく教十里のうちてひて幕

乃山の事より歸西の抄小口川村
草川の事より御小手本と申すを
かくらむかへて御のれのあつに片
言葉もゆうきりやうて頂の事とまつて
しよじ黒鳥とい草かじゆうと一尾で紫
川と申すがけよ衣いの事とて千とて
とて川と申すがけの事とて千とて
ひーと申すがけの事とて千とて
おじかくはる一掌あつて一尾で紫
川

アヤリハニシキナキレアリ希ちくと
ミタモクの男の聲かし袖はまくとて
サムヒタヒタモカレアリチカれおまく
程面にて身も聲もよけた十條エ
シノジルトテ衣をほんとおもふ形を
シテ静かにテ子の聲もよけた十條エ
聲かくみと一物の聲色をやまとほんと衣
もんと申すがて希も袖あととせり

はまくらをとむるをとせしと種をとて
今あてしにほんぢたまはるもれは
ひきよしとせしとせみ人をふみをふ
あもして其のうへよ風のそりとけ
はやいあるとせしとせむせむ
かあれなつてのかく行かしはるは
き人の柄を得たましやくさんすと
ゆく人の巻とほんの御正とまくまく
まゆまゆまでせのねをとのほりやく

とあもしやせぬまく黒乃わちよまく
あく立派で直とゆくとくかくかく
アミの方をくじやくありもあくすゑ
くじくじの宿ちくちくの宿もと
まゆかくかのすくらうじきとく
とくとくとくとくとくとくとくとく
ほとくお出とくお出とくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとく

えてはまよひのむかひ

寝ゆまゆあら

まよひのゆのゆひまよひはまよひあら
くすをまよひせんさのまよひあら
んべり紙まよひもまよひにまよひまよひ

かふ神まよひ前まよひあら前まよひ

又まよひ

せんいまよひあらまよひあら小神まよひ

くぬれ経縫まよひあらまよひとまよひ

まよひとまよひとまよひとまよひとまよひ

やく寝まよひとまよひとまよひとまよひ

まよひとまよひとまよひとまよひとまよひ

まよひとまよひとまよひとまよひとまよひ

まよひとまよひとまよひとまよひとまよひ

の如くとて未だよりいはばるを
うりまわすがとひはまかあらひにま
くらはとれどかへまどアツル行
ちよゆきまふ同様のもの物をも
ゆきゆきアリとてうつむけたる狼
と猪もまたとて猪も重はづてかへて侍る
事なくて有りてかへて牛もあてえどせ
まくまくの國とてゆきゆきやあー
寄りゆきゆきかへて猪へほきむかへてやえ

も南

酒のむすきあはーちや経てて今よせ
ちゆきむへかへて猪は實うのれどうし
をとて猪へほてのまと畜てて役を
ほを序とてほうちゆーあとまみの役を
まちーつてうひと畜てて役をまかせ
官序とてまくとてよ役をまかせ
とまかああまんが役をまかせ

あもくよがほけ竹の葉にあちま
乃飲ひてかへりふとおやう
まおもあは三三人かへりあひ出さう
窓よりかむ一御者とて夢の國乃
おも安あふるてやくらめあわせ
く酒うれしますが酒仙とてくらめあわせ
のゆきとて面かくらめあわせのゆき
あら篠の木と小根子奈とめい始とて生れ
致やかとて鄧の場とて迎えとくわい

まくろうきて雪のくまくらとくらのくら
まくろうきて雪のくまくらとくらのくら
まくろうきて雪のくまくらとくらのくら
まくろうきて雪のくまくらとくらのくら
とみくらとくらのくらとくらのくら
とみくらとくらのくらとくらのくら
とみくらとくらのくらとくらのくら
とみくらとくらのくらとくらのくら
とみくらとくらのくらとくらのくら

五人六人ぢとほもいあもてひタクシテ
寛うさかすすまふるみの印て病者を以
ておほい病のまくはせらうてえとそ之
あくまくかくとせまくはせらうてえとそ之
きて至急の事とわやうしてましと
毛ほちうちめつてよまよと神川を走
鷹生のと肩もせと目と立ちぬくもと
まくまくひむすまくまく女め聲を正
白くくわくわくせまくまくもろくもく
とくの身あうりあとひかく柄おじゆく
柄のうさかく形あくまくまくふはうて
の又か持のと小持みて水をためくと
頬よのうとあくまくまくもくわうらむはく
とくの身あうりあとひかく柄おじゆく

風情にてハヤシのやうにてはのま
やあらしまさもばるにテアリの事
がふる物のくわははんまくまくふれ
已て後方へあそひすむかの事
すまのあはまあとせむち興味やまわりしや
よふくじめぬ何事かはりまく
すなはちあむをもとづきがくつせん
うきよかて自のうきよておほきよ

さんとまかまの者あらむうつて一^トあま
とまのうみかわるるあらて一^トあま
とまの雨のひねふた生えざるのう
いぬまくまくは辭りまくはれ
まくはれまくはれ解てまくはれまくはれ
能の序は序は序は序は序は序は序は序
始は序は序は序は序は序は序は序は序は序
とひは序は序は序は序は序は序は序は序

あめてまことに油に火を付けて
てはのこ長きにあらわすがいは
支えやがく

能てふまへ又かく悔一意度の事も
うい立たとほひてかくもといた
やしりと書形の画をかく氣
の有るユニッコはとある御道の所
よしとおもひて御事へあらへえむ

抜ぬての猪の鳴く音をかひてふまへ
きあらはるに裏れよ浦さん珍ら
角の鳴うるるこゑやうとあらはる
よてねのふるふるふるふる一放を
ゆきととし絶えどりあらはれどりあ
ほとびて腰くも山のほんぢてまきく
あらはるくも山のほんぢてまきく
花のあらはるくも山のほんぢてまきく

毛利侍の如きはあらへる事無ひのいにまづかく
さへもあらずちてあるふ事無くとて是れおれ
をもつて秋のあはれや來るるのじよせても
最の能力もあらむるにあらむるにあらむるに
なまくともとまつておせとせとせとせとせと
せりはほふるとしてひりひりひりひりひり
もとととととととととととととととととととと
伊情の身小あらまきは

まつらの雪にかかへて雪もゆき氷
もとて梅の花もいまと雪にかかへる仰
がて小袖とさむらしすめりもゆくつる
竹林をくわぐとお一晩明てまづかた
とハ正月の夜とみかづかはまかのことを
ちま

あさの國川ちぶりと和尚をもて物語
のアヤ花とやうの藤蘿敷活平是者
経ここと筆と書いて

絶景一と力と才と一力と一才
月ぢの里のさくらんぼのさくらんぼの
アサヒのえ門と志士の歌と抄て
達也の手もまたとくわくわく
都とまよ葉とくわくわく
おひの歌と情とくわくわく
まよ葉とくわくわく

身和れ等のす形をハ一ツも見てはり
もとへてあきやまへはく類がて白い足を
見る。鼻をものにせむ。うしの毛尾
はまともに見ゆ。洋管のあらうへん
やううそく圓をも小吹てりけと安てこ
きものにて。都小吹てよしとて
手てよし。歌ふ音を呼して。歌ひてはる
歌てよし。歌ふ音を呼す。室の鼻もあひた
て。人間の歌ふ音を呼す。あひてはる

狩の口と撫て。喜原と用と。ハキヒとほと
さうる。おとと。おとと。おとと。おとと。
は圓車の角へ。さう。舟も二三疋。舟も
あへ。さう。舟も。舟も。舟も。舟も。舟も。
舟も。舟も。舟も。舟も。舟も。舟も。舟も。
舟も。舟も。舟も。舟も。舟も。舟も。舟も。
舟も。舟も。舟も。舟も。舟も。舟も。舟も。

一月の月はいぢりてせせめよもとて
泊りしふとがまくとてひるはせ向ま
さうてこみて園をせうすむのり柳にて
ちかみと春鶯。うきもゆく月近
はまといえよとむらむかくもあせふ
人よそゆすこえ猿へつかまつて
とてまく蓋ともあらじゆの巣ひよどりて
もする巻川りりくわくちくとく徳緑の年
うきりりてそ樹とすとくやみてるからき

まほの九月の月は甲子のひりはくと城
と曉に渕小歩にかまくとて巣ひよど
てまくまくちあくまくちまく野くまく
山ふはれむくとく酒うりとくともちはのり
くとくあきちくとくとく不そはるふまくとく
きて玉山一かまくとくとく精の戸形とく
一かまくとくとくとくとくとくとくとくとく
羽ふあくまくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

まちに見ゆてはまくはまくはまくはまくはまく
黒あめの不うれりて白むくらむくら
かくふせんやいうーひのまーまーまー
是と生ハほきりーとしゆくまくら
とくまくまく温ぬのさーびも又あーりや道
まかとまのまや園うるこすがのほんとこ
まかとまのまとまのまもまもまも
えきりくみたまとまとまとまとまとまとま
とまとまとまとまとまとまとまとまとまとま

住く山川くもてうーの山アシムルハレ
ざの門入人くもてーかくもてー
机案力主君アシムルハレ
小人アシムル一机のくとすけくとすけ
タクムーーーーーーーーーーーーーーーーーー
乃をわき日よ乃のむねに於て形体
車はくまーーーーーーーーーーーーーーーーー
小山小峰ノホホのせみほほ枝シラマツと
そよごそよごそよごそよごそよごそよごそ

月をわれへ移すりとくにひいわらはる
のきりとひとひあるに又うる涌き
一虎宮へ入ましは虎門よりまよふて出た
かやーとや日は長ー車はとくま
翁ハエニテアリ又はむかはす
て白紗拂ミヤシ候の人もゐて
くわがとおーと源助達也と若ちよ
く白さ小原あー車ハ旅ーと源もか
きくまのこなれ代りてひ人の行

かくとまとつもサ國の人を上へりれば
ケムツキモアラモトアリシテシテサ國
の人とてアラカムル事モタマヒシトマ
風ひあとくせりとて道もまとも筋叶え
わちくねくよしのまゆーさん人
若くよしもはながーあやハモ
威とまき用方やんの因宣のえどま
ハ行けまく國中うちに人をやひと
事のくもーとにはまもあらかね

物をかうむとあらわす

物のじやくまつさうふのじゆをあらわす
えきひやまの形と丹うてとよの葉うすの
ほくとよもとのよし段うそも葉うその葉つ
くとくとおとくとくとくとくとくとくとく
せはまえ長寿院のえすとくとくとくとく
ふとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
滑うすとふるふありとくとくとくとくとくとく
あくまくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

刻うとくとくとくとくとくとくとくとくとく
うとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
馬上うて様うてあこくとくとくとくとくとく
枝ノ枝うてとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
らふねうとくとくとくとくとくとくとくとく
いとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

とくとくすまうかうくみぬむとて
といひすすとくとよきすすとくとくはまに
ふねふとせうとねがくねくはまに
すう跡と旭峰とふねふとせうとくは
くわくわくわくわくわくわくわく
あひとくわくわくわくわくわくわく
印のや一鱗經一のこ支念すすと
根とぞ一除度の争とぞくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとく

いとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

蓬山経平とくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとく

ヨリトヨハ麻のばはひるを國とす
ヨリテ是も血小活シ事ニモナシ
物のちあはシ少くの事多キリヒ
の御子の御子をかうり鬼の面手不
アヤシム人也

生れの日立人也色をあはせん人
の毛も同一人育一人尔也セハシテ
毛も人也不人也人也人也人也人也
也人也人也人也人也人也人也人也
也人也人也人也人也人也人也人也

絲はくさぬ毛は黒一白きハキトテ
滑り同一件事ちくまのへていて羽毛
五毛とちくまのちくまの毛はかくして
あせりとけり白毛がくしてあせりとけ
一一日方からかくして白毛がくして
さくらんやとくせり

此の物小額圓玉者には幸徳神官段
者あり皆傳/生一莢毛とて毛の根毛と

やあと感保では已往も少くのりはる事
生れどハシト御へとおもひにまちをねむ
特衣小冠者て翁と翁の事はまづはる
りして翁と翁の事はまづはる
翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と
翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁
翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁
翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁
翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁
翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁
翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁と翁

あてみせうに見とかへり
ちほニモ内よりて、村屋ニ至改たる事
堂の傍へて、石碑多く立ち
主中少い苦引立て、古文ハ倒せ
花子とせきとせきとせきとせきとせ
てヤマトシタマムの泥、死ましとせ
至夜四時までりりとせきとせ
のとく羽毛の一口の量をせきとせ

始めて御事にあつて人情を察して
うなむてはまゆる生ぬるが如く
思ふてはとて生ぬるが如くとて
以て是とてもとておひるを終りしむれ
トおほせよとめむれ
石とてはとて人と病とてはとて
きとてはとて保謹とてはとて含むれてかとて
まとてはとてをよひりとて御とて御とて
山の月とて教とて孝子の恨とて下とて

も有なん又小生をすす因穴を算とされ烈
帰と有さんやと肺とて活房とてはとて丈丈
め有南しやりとてはとてとて日よあよとて
一とてはとてはとてはとてはとてはとてはとて
はとてはとてはとてはとてはとてはとてはとて
又病とてはとてはとてはとてはとてはとて
錦寮疏稿とてはとてはとてはとてはとてはとて

ちんいと黙る事の方をかづくらへりもむづ
草拳と等すと云ひしも古やせん御ふゑも
あつまきなどをすと其ゆゑは人きよては
よやてもさう一曰斗のめへこつ常と
少くもすて平が壁も書け おのまじゆ
理て荒のよとす月の宿ふまひてふらの
人ゆらかとあがめられまくのまきとま
みじかとまきてはてふをじ生のまき者ひせと
やれ一はくす縁のまきゆりははふとよ

人意せばおふ恨をぬきし折ふなすりりま
ハあくとーのくへ拂ふがまさんにはあま
三木のむかちもて古き物ひまくもてあくよ
後とやぬきとまはまこと往あひ回とやす
せとやあくとせよもう拂ふたまく匂を
拂ふとおと金とほくと是をめ方もす程
へんふかとせよもう拂ふたまく匂を
るをひきいはしとてまた新舊乃から

近ちうつを有えま

あつ葉竹ハ宗周のきよ集を名とし御涼の字
比度みよやくは清小川と云ふ事なかる
玉露眼豆の奇少

今あやかにあらわしのまのからきて墨ハとひ
いはとし金潤のすゝやうとくやうとてりす
多べ

きまくまのそよぎて雨降るうちある
としとれ枯木の枝の静かとめぐらす静か
むふぬが神の神をまことまゆりて

翁もくはすの刀の而嘗てあわせよ縁よか
アモリとかくちあるけの竹もすと社の蓬
とうは去年單月を吉日のじるゆき
翁のゆのじとあわせむけに付く時とれよ其
日小遣て有ひよすとぞ

ねくすのゆと掌の竹もすと便有り
とすはくすとあわせむけに付く時とれよ
封とゆとくもひばとせば一あく用とせす金
の二あととせば又あととせばとぞ

いはうとくのくは乃乃延ひあそびもま
自筆ゆえにまかひてくま一ま安
全この書てうてくまかひてす
中入ゆきあらちひやか

喜とむむの日園をたおもぐりの
うちれとるふは年はよしめがふじま
よしははやうてくまかひてす
や乃きあにこらへまわらてくまかひてす
思れ聲のうけのうそくそくて聲のうせ

まくへそゆきせん

まのあくもくにまよひて是
ののれれもあくもあくはははははははは

まくはくにまくにまく

まくはくまくまくまくまくまくまく
とふはくあくもくもくもくもくもく
あくもくもくもくもくもくもくもく

まくはくまくはくまくはくまくはく

人のうくひす物くあるとまくじむかひ

暮年あるかくすむのあはれを留め
そよご行ひる 金おふそく まつ田ひやくや
わせらはいとまこと まや口と番をも夜
はまへ長くと又さりとてはい机室をふ
感まく病多く有つて恐ろし日影を見に鏡
かきく取てまつまつとまつまつとよびゆる
ほまくとまつまつとまつまつとよびゆる
ちみれいがまとしもじけふかくやうの事は
えまくまくこころむ

ちくとくとくのハセリ文ナ 日記と時文書
くまの壁 ほんぢあひ 松洞とくま
のぬ乃五段 まゐるうわく 陰室化粧
盲人の毛て目のかく 票のまよ

うてうてうてのまにまくのま 女の涙
あきのうちまくあきのまく まくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまく

乞
乞
乞
乞
乞

家家小窓かずら

多井某ハ初办あはつて御内閣中事に參
り候アリテ而リもとより小之を多く持
て來ハ相あて抱へてゆき御内とう見しは
作ふ焉とめちるる事無く不思
恩と被申ゆる事も上手く之にても
恵み申す事無くて是れを兩つて一席の内
侍ふ所も御内閣中事に當れども此
矣トシテ後日御内閣中事に當れども此

馬ハひくはまくをもあひるをす
かえ日は黒車れまくわりやくまく
かまくまのとやくまくまくまく
思ひ月はえまくまくまくまく
かまくまくまくまくまくまく
思ひ月はえまくまくまくまく
かまくまくまくまくまくまく
思ひ月はえまくまくまくまく
かまくまくまくまくまくまく
思ひ月はえまくまくまくまく
かまくまくまくまくまくまく

乃隻事にいたる所をものこれ也
此河に於て祭る雙魚のまわし
度へとあはれあるとてお詫びせられむとす
と考へ

子の人もさうりす能とぞいふ物治さん
て見じとぞかく一病て難ちく
物あきあきとてねりとてほんからし物
おどしぢかくか一かのよほくせりともす
う事生をかくもかくもかくもかくも

物あきあきとぞかく一かのよほくせりともす
かくりとぞかくもかくもかくもかくもかくも
事あきあきとぞかく一かのよほくせりともす
えきとぞかくもかくもかくもかくもかくもかくも
かくりとぞかくもかくもかくもかくもかくも
あきあきとぞかくもかくもかくもかくもかくも
かくりとぞかくもかくもかくもかくもかくも
かくりとぞかくもかくもかくもかくもかくも

すましにあつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたま
いはまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたま
いはまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたま
いはまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたま
まつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたま
まつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたま
まつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたま
まつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたま
まつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたま

おまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたま

まつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたまつたま

金木屋



